

草の芽句会だより

NO,116
18,4、5

城壁を覆い尽して若葉かな
人力車二台並べて花の城

節子

旧友と話しのはずむ花の下
花冷えの見上げる天守雲流る

貞子

見上げれば芽吹きの中の天守かな
行くところ桜々の旅終る

芳子

花ぐもり半額セールの太き文字
先立ちて紫木蓮の苔みたり

純子

葉桜の陰雪洞の揺れ止まず
軽トラの荷物下して花庭

文子

花冷えのベンチにしばし句友待つ
散りいそぐ城のベンチの花見句座

範子

風に舞ふ落花の行方見失ふ
上り下りして城山の春惜しむ

剋子

天守閣と桜を入れて自撮りかな
城の濠亀の甲羅に花の屑

禮子

幼な子のよちよち歩き散る桜
芝生にも我にも花の散ることよ

貞

出席者 氏家 川原 小林 森 大黒 吉崎 小山
投句者 馬場 真鍋

うるし林はもう葉桜になっていた。サワサワと葉摺れの音がなんとも爽やかである。運よく広場の真中にテーブルとベンチが空いていて早速陣取ることに。落花が髪や肩に舞い散る。句会もそこそこに、広げるお弁当にも花びらが散り込む。素敵なお花見である。「今年も元気で花見ができたな」「しばらく休んどったけど、皆に会いとうて早起きして電車で来たんで」「葉桜のやさしい緑色がなんとも言えん」平均年齢は高くなっても、自然を見つめる感覚は衰えない？私達。差し入れのお菓子も全部平らげて、「楽しかったなあ」と大満足で帰途についた。

